

2022. 7. 17 (日) 使徒2:37~39

2:37 人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言った。

2:38 そこで、ペテロは彼らに言った。「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。

2:39 この約束は、あなたがたに、あなたがたの子どもたちに、そして遠くにいるすべての人々に、すなわち、私たちの神である主が召される人ならだれにでも、与えられているのです。」

#### <説教>

今からおよそ2000年前のペンテコステ（五旬節）の日、他の十一使徒たちまた弟子たちとともに聖霊に満たされた使徒ペテロによって初代キリスト教会最初の説教がなされました。聖霊が自分たちにお降りになったのは神が預言者ヨエルによって約束しておられたことを実現なさったことである、と。またイスラエルの人々が十字架につけられて殺したイエスを神はよみがえらせたが、そのこともまた預言者ダビデによって神がお語りになっていたことを神が行われたことであった、と。その生けるイエスが約束の聖霊を自分たちに注いでくださったのだ、と。父なる神がイエスを死人の中からよみがえらせ、神はイエスが生ける神の子、約束のキリストであることを公にはっきりとお示しなされた、とペテロは語りました。そして同時に、ペテロはイスラエルの人々の罪をはっきりと宣告しました。「神はナザレ人イエスによって、あなたがたの間で力あるわざと不思議とするしを行い、それによって、あなたがたにこの方を証しされました。それは、あなたがた自身をご承知のことです。」(22) なのに「神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエスを、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。」(23)と。また、「神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです。」「イスラエルの全家は、このことをはっきりと知らなければなりません。」(36)と。それを聞いたイスラエルの人々の様子は次の通りでした。

〈人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいのでしょうか」と言った。〉(37)

どうしてイスラエルの人々が〈これを聞いて心を刺され〉のかは明らかでしょう。それは自分たちの罪を示されたからです。〈ナザレ人イエス〉を、神が自分たちに約束して下さっていたメシヤ（すなわちキリスト）、救い主として信じ受け入れなかった。反対にイエスを拒絶して〈律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺した〉(23)、〈神が今や主ともキリストともされたこのイエスを、…十字架につけた〉(36)。そのようにして自分たちは神に反逆し敵対していたということを知らされたからです。確かに彼らは彼らの律法学者や長老たち、パリサイ人たちのようにはイエスを憎んでも妬んでもいなかったかもしれませんが。しかしイエスではなく律法学者やパリサイ人たちの言うことに従い、イエスを十字架につけると叫んだ人々の中に彼らもいたに違いありません。「自分たちはよく知らなかった。律法学者やパリサイ人たちにだまされていただけだ。」というのは言

い訳にはなりません。マタイの福音書（23 章）で見たように、律法学者やパリサイ人たちを厳しいことばで断罪されたイエスは最後に「これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。」（マタイ 23:36）と言われ、「エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。…」（同 37）と言っておられました。そのように、律法学者やパリサイ人たちのようにであれ、他の普通の人々のようにであれ、イエスを拒んだ（すなわちイエスをお遣わしになった神を拒んだ）人々の罪をイエスは指摘しておられました。ペテロもこのイエスの言い方に倣ったのです。なお、これまで預言者ヨエルやダビデのことばによって聖霊のことイエスのことを解き明かして来た仕方も、〈モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた〉（ルカ 24:27）イエスから学んだものだったと言えるでしょう。

「兄弟たち、私たちはどうしたらよいでしょうか」との切羽詰まった訴えに対するペテロの答えが 38-39 節に記されています。〈許していただく〉べき〈罪〉（38）とは既に示されたように「神が今や主ともキリストともされたイエスを十字架につけて殺した」ことです。しかしそんな「行い」以前に、そんな行いの基、動機として、イエスを「主ともキリストとも」認めない信じない不信仰、そうやってイエスに背を向けていた〈心〉（37）こそが〈罪〉なのです。そして後にペテロがその手紙で言うように、イエスは確かに十字架につけられて殺されたのですが、それは実はイエスが〈自ら、十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた〉（I ペテロ 2:24）ということだったことを今の私たちも知らなければなりません。それでどうしても必要なのが〈悔い改め〉です（38）。それはイエスを「主ともキリストとも」信じていなかった、イエスに背を向けていた自分の〈罪〉を認めることです（当然そこにはそんな罪深い過去についての「悔い」が含まれます）。しかしそこで終わらず同時に「改め」ることが必要です。つまりイエスを「主ともキリストとも」信じないでイエスに背を向けイエスを無視していた〈心〉の態度を「改め」ることです。「イエスは私の主です。生ける神の子キリストです。」と信じて〈心〉の方向を 180 度「改め」「方向転換」してイエスの方を向くことです。「私がイエスを十字架につけた。イエスが十字架の上で私の罪をその身に負われ、私の罪のために死なれ、よみがえられた。だからイエスのうちにこそ私の罪の赦しがある。」と信じてイエスのもとに立ち帰ることで、だから〈悔い改め〉には必ず「イエスを信じる信仰」が伴います。むしろ「イエスを信じる信仰」から〈悔い改め〉が生まれます。そしてこの〈心〉の方向転換は〈イエス・キリストの名によってバプテスマを受ける〉という形に表れなければなりません。「その方の名を呼んでバプテスマを受け、自分の罪を洗い流しなさい。」（22:16）とあるように、水による洗礼はイエスの十字架の血が私たちの罪を洗い流す（つまりイエスのうちに罪の赦しがある）ことを表すものです。このイエスにある「罪の赦し」を私たちは「信仰」と「悔い改め」によって無償でただ恵みとして受けるのです。そして〈聖霊〉も同じく無償で、恵みの〈賜物〉として受けると神は約束してくださっています。もちろん、イエスを信じること、悔い改めること自体のうちにも聖霊が働いてくださっていますが、信じる者にはますます豊かに、殊に「イエスの証人となる」べく聖霊によって力が与えられるのです。私たちは、そのように〈私たちの神である主〉によって〈召される人〉（39）であることを信じなければなりません。そして自分だけでなく、〈子どもたち〉〈遠くにいるすべての人々〉をも神が召しておられることを信じてイエスを証しして行きましょう。

ペテロたち一人ひとりの上にお降りになった聖霊は、イエスによって約束されていた聖霊でした。その日の10日前にペテロたちの見ている前で天に上げられて父なる神の右に着座なさったイエスが約束の聖霊を御父から受けてペテロたちに注いでくださったのでした(33)。聖霊に満たされ聖霊に導かれたペテロの説教の最初の聞き手はエルサレムにいたイスラエルの人々でした。ペテロが彼らに語ったことは、神のみわざのことでした。つまり、神が預言者たちを通して(今で言う旧約)聖書のうちにお語りになっていた通りに神が実現なさったことを語りました。それは神が聖霊をイエスの弟子たちの上にお注ぎになったことであり、